



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成23年1月21日

通巻67号

アジア太平洋総合農村開発センターと覚書調印

本会は2010年12月23日、ダッカに本部を置く国際機関、アジア太平洋農村開発センター（Center on Integrated Rural Development for Asia and the Pacific）との間で、エコロジカル・サニテーション（以下エコサン）の推進に関して、協働していくことに合意し、互いの役割を確認する覚書を交わしました。

CIRDAPは、農村開発と貧困削減を目的とする国際組織で、東南アジアから西アジアまでの15の国が参加しています。これまで、参加型の村落開発手法（CARD: CIRDAP Approach To Rural Development）の開発や保健衛生分野を含めたさまざまなアクション・リサーチを行ってきています。

発端は、CIRDAPが進めている小学校のヘルスケア・プログラムにトイレの改善を含めてはどうかという話し合いでした。今後、CIRDAPに加盟する国で、エコサンに関連するプロジェクトを実施する場合、本会は、技術面、実践面で中心的な役割を担うすることになっています。当面は、バングラデシュ国内のプロジェクトなるでしょうが、CIRDAPの担当者はアフガニスタンも視野に入れているようです。

こうした組織と共同のプロジェクトを行うことで、衛生改善効果について医学的知見を含めたより信頼性の高いプロジェクト評価が可能になるのではないかと期待しています。さらに、バングラデシュにとどまらず、

CIRDAPの加盟国を含め、エコサンならびにプロジェクト成果を広範に伝搬していくことも可能になります。

CIRDAP側では、これまでの小学校のヘルスケア・プログラムにエコサンの導入を図るプロポーザルをJICAへ申請し、さらにはビル&メリンダ・ゲイツ財団へもエコサン関連プロジェクトの申請をしていると聞いています。

2004年から始めたバングラデシュでのエコサントイレ導入のプロジェクトも8年目を迎えますが、今回の覚書交換は広くアジア諸国への展開の可能性を期待させるものといえます。

(文責 本会代表 酒井彰)



CIRDAPのDurga Prasad Paudyal所長との覚書の交換
(左は筆者、2010年12月23日CIRDAP本部にて)

第51回定例研究会のお知らせ

年度末も押し寄せまわりますが、下記要領で、第51回の定例研究会を開催いたしますので、ふるってご参加ください。いつもと会場が異なりますので、ご留意ください。

記

日時：2月18日（金） 18:00～20:00

会場：新宿区環境学習情報センター研修室

（エコギャラリー新宿2階：新宿中央公園内）

講師：大松駿一氏

（神田川ネットワーク・NPO法人水都東京を創る会）

演題：「絵解き・神田上水」

概要：古今の絵や写真約70点を使って、神田上水の概要を語る。寛政期の流路図から大洗堰・水道橋掛樋・水車画のいろいろ、松尾芭蕉がかかわったと思われる改修工事の場所、幕末の大砲づくりなどまで話が及ぶ。

会場アクセス（右図参照）

- ・新宿駅西口から徒歩15分
- ・地下鉄丸ノ内線西新宿駅〔2番出口〕から徒歩10分

- ・地下鉄大江戸線都庁前駅〔A5出口〕から徒歩5分
- ・バス停 《十二社池の下》徒歩1分
- ・TEL 03-3348-6277



バングラデシュ現地スタッフのご紹介

バングラデシュにおけるエコサン・トイレの導入ならびに管理に関するプロジェクトも、地域的にも内容的にも広範で多様な展開を見せています。今回は、現地でプロジェクトを担うスタッフを紹介いたします（氏名、担当、学歴、年齢、ひとこと）。今後、彼らにも「ふくりゅう」に記事を執筆してもらいたいと考えてます。

	Name: Tofayel Ahmed Designation: Deputy Country Representative Education Background: Master of Science in Chemistry Age: 36 years <i>"Love and wisdom may be the prefeable weapons to ensure a sound management"</i>	Name: Qazi Azad-uz-zaman Designation: Manager, Research, Monitoring & Evaluation Education Background: Master of Science in Statistics Age: 30 years <i>".....Learning from the village people, JADE has created opportunity for me"</i>	
	Name: Musleh Uddin Parvez Designation: Manager, Program Education Background: Master of Science in Agricultural Chemistry Age: 31 years <i>"Thanks to JADE for giving opportunity to work for human being"</i>	Name: Md. Yusouf Ali Designation: Project Coordinator Education Background: Bachelor of Arts Age: 35 years <i>"I hope good fortune of human beings by JADE"</i>	
	Name: Shuvo Ramo Saha Designation: Assistant Engineer Education Background: Bachelor of Science in Civil Engineering Age: 25 years <i>"I want to go forward with JADE through its dynamic leaderships"</i>	Name: Md. Jubayer Hossain Designation: Accounts Officer Education Background: Bachelor of Commerce Age: 34 years <i>"Social accountability of JADE inspire me to be a member of it"</i>	
	Name: Md. Lutfour Rahman Kibria Designation: Monitoring Officer Education Background: Master of Social Science Age: 28 years <i>"I feel proud to work with the villagers; I am dedicated to fulfill the purpose of JADE"</i>	Name: Md. Shariful Haque Sikder Designation: Monitoring Officer Education Background: Master of Arts Age: 28 years <i>"Love, power of willingness and guidance of JADE made us vigorous, dynamic and forceful"</i>	
	Name: Khandoker Romi Akter Designation: Monitoring Officer Education Background: Bachelor of Arts Age: 27 years <i>"A Man can live longer time through honest willingness, honest activities and honest behavior"</i>	Name: Md. Sahiduzzaman Designation: Monitoring Officer Education Background: Bachelor of Social Science Age: 26 years <i>"JADE is an ideal Humanitarian"</i>	
	Name: Anupom Kumar Mondol Designation: Monitoring Officer Education Background: Bachelor of Arts Age: 26 years <i>"JADE will be advanced for ecological sanitation as an author of EcoSan toilet"</i>	Name: Md. Fazlur Rahman Designation: Supporting staff Age: 50 years <i>"Being a member of JADE I feel proud"</i>	



関西支部活動紹介 ～やえざくら祭り～

本会運営委員 藤田 俊彦

関西支部活動は、年刊「下水文化研究」の「関西支部事業計画」に紹介されているが、その具体的な活動内容について、「イベントへの参加」のうち、「やえざくら祭り」を例にとりその一端を述べ、現状と今後のあり方を考察する。

「やえざくら祭り」について

兵庫県には流域下水道が4流域6処理区あり、うち、下水道関係イベントが開催されているのは、加古川上流処理区の浄化センターにおける「やえざくら祭り」のみで、そこへは毎年約15,000～18,000人が訪れている。

この祭りは、浄化センター開設に当たって、処理場周辺地元より「集客施設誘致或はイベント等の開催」の要望を受けたもので、センターに隣接する一級河川加古川河川敷占用等国交省（管理者）の協力を得て、八重桜を植樹したのを契機に、花盛りの4月下旬の日曜日に、地域参加型イベントとして、水処理施設覆蓋上に設けられた特設舞台での地元小学校児童による演舞や婦人会による日本舞踊発表会、子供連れを呼び込む人気キャラクター出演、そしてその周りの空間で各地元商工会の特産品販売やフリーマーケット等が催される。

運営主体は、兵庫県まちづくり技術センター（県から維持管理を受託）と事業促進協議会（流域関連六市で構成）共催で、処理場内の一部を開放し、スタンプラリー等を催している。



水処理施設覆蓋上の会場全景

当会の参加目的

上記イベント開催経緯から、当会草創時、稲場現評議員が手掛けられていた活動内容を引継ぎ、積極参加が適当と考え、一般市民、特に次代を担う子供達へ下水道の大切さ・下水文化の啓発にあわせ、当会活動のPRを行う目的で参加している。

ブースでの展示等

パネル～当会のPR・下水道の歴史・同仕組み等を展示。来客への説明は支部長を主とし会員が適宜対応。

下水汚泥有効活用製品等～県下の処理場から集めた製品見本を若干の説明書と共に展示。

資源有効活用製品展示及びくじ引配布～古紙再生トイレットペーパー・同ティッシュペーパー・廃油再生石鹸等を支部予算の中から買い揃え、リサイクルの大切さ等の説明を加えながら、くじ引で該当製品を無料配布する。

当会発行の図書展示販売

子供向け魚釣りゲーム～ブルーシートを段ボール箱にかぶせ池に見立て、そこへ手作りのクリップ付各種魚を入れておき、磁石付竿で吊上げるといったもの。吊り上げた魚の名前とすぐ横にある「水質毎生息魚一覧表」での位置付けを確認させ、最後にキャンディをあげる。

活動内容と考察・提案

参加スタッフ～毎回4～5人で、ほとんどが運営委員である。混雑時は不足で、一般会員にももっと関心を持ってもらうよう積極的に参加を呼掛ける必要がある。また、スタッフの服装は目立つ揃いのTシャツまたはハッピーに。ブースレイアウト～当ブースへの客は全体の一割弱で殆どの客はブース内に入っても素通り。子供連れ客が興味を持ち、入り易いようにパネルの展示方法やレイアウトを再考。例えば入口の大看板は「下水文化研究会」でなく、「下水も大切な資源」あるいは下水にこだわらず「水を大切に！」のように「訴え」を目立つ赤色主体で漫画チックな大きな文字に。会名は小さくあるいは思い切って入口看板から除く。パネル展示はブースの内側にしたが、パネルのうち、子供が興味を引くような物は、表の目立つ所に展示する。



当会のブース全景

ブース内にBGを～例えば年末紅白で感動させた「トイレの神様」。作詞者の意図を拡大解釈すればピッタリくる。

無料休息所設置～会場全体に休息所が少なく、客を引き込むのに有効。

パネル種類～「下水」に限らず「水全般」で関心の高い内容。例えば「地球の水資源の円グラフ」など。

魚釣りゲーム～子供の人気高く長蛇の列の時は十分な説明出来ずただ遊ぶだけになる事が多い。大切な子供達との対話の好機と捉え、スタッフのやりくりや水質毎生息魚一覧表パネル数を増やし対応する。対応しきれない場合はその小型版印刷物を持ち帰ってもらう。



魚釣りゲーム

汚泥有効活用製品展示～関心度はいまひとつ。パネルと製品を並列させる等、判り易い説明を加える。

資源有効活用製品展示及びくじ引配布～身近な商品と言うことで直ぐに無くなる。これも一般市民との対話の好機で、商品数を増やしたい。予算増と格安値での有料配布を再検討。

おわりに

この祭りは覆蓋上の工事で現在中断、財政難のおり、このような行事は一度中断すると復活はほとんど望めないが、私達NPOもお祭り好きの一般市民をバックに行政側へ復活の働き掛け、そして一歩踏み込んで、手作りイベントを行政との共催で新規に開催してはどうか。



第62回 屎尿・下水研究会例会報告

清水 治氏 『世界の列車トイレの現状』

平成22年12月9日（木）新宿エルタワー26階、TOTO 東京センターショールーム会議室において標記の研究会が開催されました。

本会の会員である清水治氏は熱烈的な鉄道愛好者であり、世界各国を列車で旅しています。今回は、それらの列車のトイレを写真により紹介し、楽しいエピソードとともにお話を展開されました。時間の関係もあり、紹介された国は、イタリア・スイス・ベルギー・オランダ・チュニジア・エジプトの6カ国となりました。以下、各国の様子を簡単に記します。

イタリア

イタリアの鉄道網は日本と同様に良く整備されています。しかし、概して列車トイレは汚く、開閉できない窓、鍵のかからないトイレ、落書きだらけの車両が結構あります。ユーロスターのトイレは少量の水を使った真空式のトイレで、汚物はタンクに貯留されていると思われます。しかし、IC特急や一般自由席の急行、普通列車は水洗ですが、全て垂れ流しです。これは、車両が旧式によるものではなく、民家の近くを走る最新型の気動車も垂れ流しのようです。

スイス

スイスを走る、フランスのTGVやドイツのICE、ユーロシティECなどの国際特急列車の車両は真空式トイレでタンク貯留式です。しかし、その他の国際列車のインターシティ（IC）、インターレギオナル（IR）や普通列車のトイレは垂れ流しです。列車は、路線ごとにトンネルなど使用禁止区間を設けて、車内放送で注意を呼びかけています。また、私鉄の登山列車にはトイレが無く、各停車駅のトイレで対応しています。

ベルギー・オランダ

ベルギーの国際列車として有名なのが、3国共有運用の高速列車「タリス」です。タリスは、パリとブリュッセル間を結び、一部がアムステルダム及びケルンにまで延びています。このタリスの列車トイレは少量の水で水洗できる真空式で、汚物はタンクに貯留されています。

チュニジア

チュニジアの鉄道は、フランスの植民地時代に整備され、フランス製の車両が多くなっています。トイレは垂れ流しが多いようです。

エジプト

エジプトの列車トイレには、トイレットペーパーが置かれていません。イスラム教徒が人口の大半を占めるため、お尻洗浄用のパイプがあり、踏みボタンを踏むとパイプから水が出る構造になっています。

以上が概略です。冒頭にも述べましたが、講演は写真とエピソードを交えながら行われました。清水氏がイタリアのユーロスターの車両の下を覗き込み汚物貯留タンクを確認していたところ、駅員に不審がられてしまった事があったそうです。列車に限らずトイレの写真を撮る時には、何か誤解されるのでは無いか、変に思われのではないかと、常に不安と緊張が走るもの。これは、日本においても心をよぎるものです。ましてや、言葉も習慣も異なる海外であるならば、尚更の事。カメラ片手に不審がられ、逃げれば逆に更に怪しまれてしまうことでしょう。しかし、説明するにも、正確に自分の趣旨が伝わるか、また理解し

てもらえるだろうかと不安でなりません。そのような感情を乗り越え、多くの海外の列車トイレを撮影された清水氏の、トイレへの熱い情熱を改めて感じさせられたエピソードのひとつでした。

今回の例会では、清水氏の講演の後、引き続き『真夜中の河』という映画の上映をダイジェストで行いました。この作品は、『北の国から』『駅』『マルサの女』などの出演で知られる、南雲佑介氏が製作・脚本・監督・出演を行ったものです。南雲氏が役者の下積み時代に約10年間、実際にアルバイト体験した下水管渠清掃を題材とした1988年の16ミリ自主制作カラー映画です。全編を通じて、下水管内での清掃作業の様子が克明に描かれ、作業員としての働く姿、人間像を追っている映画史上異色の作品といえます。

そもそも今回の上映の切っ掛けとなったのは、1冊のプログラムです。そのプログラムは『真夜中の河』。本会幹事の地田氏が偶然古書店で手に取り購入したものです。このたった1冊のプログラムを手掛かりにして、地田氏はフィルムの所在を突き止め、今回の企画が成し遂げられたのです。

第62回 屎尿・下水研究会例会は、清水氏・地田氏のトイレ・下水への一念を強く感じさせられるものでした。

（文責 本会運営委員 森田英樹）



清水治氏講演風景

平成22年度 小平市ふれあい下水道館・特別講話会 第2～3回の報告

小平市ふれあい下水道館の講座室において、11月14日（日）および12月12日（日）の13時30分～15時30分に一般市民の方々を対象とした特別講話会の第2回、第3回を開催しました。

第2回「東京におけるごみの埋立て」

講師は元東京都清掃研究所所長（現廃棄物政策フォーラム理事）の根本康雄氏にお願いした。東京で発生する「ごみ」の最終的な行き先である、海面域や内陸部の



「ごみ埋立て地」の歴史的な変遷について、豊富な写真を駆使して述べていただいた。その骨子は以下のとおりである。

- ① ごみの最終処分場の目的、工法（投棄、衛生）、構造（嫌氣的衛生、準好気性、好気性）、方式（サンドイッチ、セル）について、その概要が解説された。
- ② 8号地（潮見）や14号地（夢の島）は、投棄埋立である。
- ③ サンドイッチ方式は、ごみを埋め立てた上に覆土し、その上にまたごみを埋立てる方式である。この方式が本格的に実施されるようになったのは、夢の島でのハエ騒動（昭和40年）以降のことである。
- ④ セル工法は、中央防波堤外側の埋立て以後に採用された。
- ⑤ 15号地（現在の若洲ゴルフ場）の第2期工事（昭和41年）の「ごみ埋立て地」造成工事に関わって以来25年間、埋立て地の仕事（工事、設計、計画）に携わってきた。粗大ごみの破碎処理施設や分別ごみ処理施設の計画にも関わった。
- ⑥ 15号地へのごみ搬入は最初、船で揚陸していたが、42年4月に若洲橋ができ陸送が可能になった。汚水対策は準遮水（目視で汚水が護岸から流出していなければ良いという意味）であった。浸出水を圧送管で中央防波堤内側処分場にできた水処理施設に送るようになったのは、ずっと後になってからである。当時は、二重鋼矢板の護岸を造ってその上に車を走らせるというような構造が、画期的な施設であるといわれた時代である。
- ⑦ 昭和45年に廃掃法ができ51年に改正され、これを受け53年に「廃棄物最終処分場指針」が刊行され、ごみ埋立て関係の法整備が進んだ。最終処分場の建設に厚生省の補助金が出るようになったのは、昭和51年頃であ

る。また、昭和51年、廃棄物処理施設も港湾施設の一つとして認められた。

- ⑧ 昭和63年に「廃棄物最終処分指針」の全面改訂が行われ、今までの実績や経験を基に、特に、遮水や汚水処理施設の項が充実した。
- ⑨ 中央防波堤内側の埋立て地に設けた汚水処理施設は、生物処理（回転円盤法）、薬品凝集沈殿処理や物理吸着処理を組合わせたものである。処理水は下水道に排水している。
- ⑩ 多摩地区の各都市は、内陸部でのごみ埋立て地をそれぞれ独自に確保し処分していたが、昭和55年に東京都三多摩地域廃棄物広域処分組合を設立して、谷戸沢処分場（昭和59年開設）、二ツ塚処分場（平成10年開設）やエコセメント施設などを造り、共同利用している。

第3回「農村改善運動とトイレ・上下水道」

講師は小峰園子氏（葛飾区郷土と天文の博物館）である。大正から昭和前期にかけての農村における「生活改善運動」に焦点を当て、その中でトイレや上下水道に関する文化がどのような変化をみせていったかについて話していただいた。加えて、飲料水の天秤棒による運搬や非衛生的な農業用水利用を打開するため実施された、近代的な簡易水道造りを扱ったドキュメント映画「生活と水」（羽仁進監督）を鑑賞した。この映画は今となっては、当時の農村生活の赤裸々な生活実態を知るうえでたいへん貴重な資料となっている。以前、【尿尿・下水研究会の第53回例会】で行った同様のタイトルの講話の市民版である。詳細は「下水文化研究 第21号」の57～59頁を参照のこと。

（文責 本会運営委員 地田修一）

第63回尿尿・下水研究会例会のご案内

日時：3月24日（木）18時30分～

場所：TOTO・東京センターショールーム会議室 新宿区西新宿1-6-1 新宿エルタワー26階

TEL. 03-3345-1010 （JR新宿駅西口より徒歩5分）

講師・演題：新保 和三郎 氏（元本会会員）『東京・下水道よもやま話』

内容：戦後、東京の下水道事業を本格的に展開するに当たり、模索した行財政計画の軌跡を振り返り、それぞれの節目におけるエピソードを披露するとともに、ご自身の感慨を述べる。

備考：当日は、テレビで放映された広報番組「こんにちば東京 地下1世紀1万キロ」（昭和57年、テレビ朝日、30分）を上映します。東京都下水道局（当時）の新保さんや松下行雄さんが説明されるほか、トイレ研究家の李家正文氏がコメントしています。また、「尿尿・下水研究会 文化資料3 論考—トイレと下水道—」を配布します。

旧事九官録 巻16

網走監獄の事

本会運営委員 森田英樹

生まれて初めてレンタカーで北海道を旅した。北海道の雄大な大地を自動車でひたすら走る旅を一度は経験してみたいと思ってはいた。ところが、今までなかなか重い腰が上がらなかった。普段、街中のビルの谷間をチョコマカ走っている私にとっては、北海道の道は魅力的であった。果てしなく広がる平野、地平線の彼方に真っ直ぐ消えていく1本道、なにひとつ遮るものの無い天蓋のごとき大空。しかし、そんな魅力を容易に打ち砕く程の

恐ろしさが、北海道の道にはあった。それは、『交通取締』「はい速度超過、免停です。お疲れ様でした・・・」こんな事にでもなったら、楽しい旅行も一転してお通夜の晩になってしまう。私は、もとよりスピード狂ではないが、広大な大地では、速度感覚も狂い、知らず知らずのうちに高速になりかねない。くわばら、くわばら。

順調に楽しい旅は続いた。しかし、私の頭の中にある



のは常に速度計の事ばかり。地元の人と交わす会話も、『取り締まり』の様子を聞きだす事。いつもなら、あの手この手でトイレ情報を探り出しているはずなのに・・・。まるで、別人に成り下っていた。

最終日、知床に居た。女満別空港発最終便を予約していた。出発までの時間、何をしようかな。そんな折、1枚の観光案内に目が留まった。『博物館 網走監獄』網走刑務所の旧建造物を保存・公開する野外博物館のようだ。『絶対にトイレがある』いつもの感覚が蘇って来た。年中無休。午後6時まで。入館は午後5時まで、とある。カーナビの到着予定時刻は丁度、17時と表示されている。急げば間に合う。とにかく、急ごう。急発進した。

快調に走り出すや否や、一転にわかには天候が悪化してきた。強風・大雨。いわゆるゲリラ豪雨というやつだ。速度も20～30キロを出すのがやっとだ。道中、初めての雨が、何でよりによってこんな時に。やがて、天候も回復してきた。急ごう、遅れを取り戻さなくては。徐々に回復して行く視界の先を走る車の姿が何か変だ。あれは、よもやパトカーでは・・・。道中、初めて見るパトカーであった。絶望的だった。有難いことに、網走まで、パトカーがゆっくりと先導してくれた。不思議な事に、時刻はまだ5時前だ。間に合った。狐につままれたようだった。

入館して、哑然とした。広さ5万坪。行刑資料館を含め、その数30を越える建物が広がっている。予習もしていない状態では、とても1時間では手に負えない。とりあえず、全体像を知るためにも、行刑資料館に行った。昭和59年に建設された現在の網走刑務所の実際の部屋が再現されていた。解説プレートには、『被収容者の処遇環境は老朽化した木造舎房から清潔な鉄筋コンクリート造りの施設に変わり居住性に問題の多かった舎房は現在、採光、風通しの良い衛生的な構造の居室へと格段に向上しました。流す涙も凍ると言われた網走刑務所も現在は快適な温度管理がなされています。被収容者は刑務所に収容されると、単独室、又は共同室に収容されます。定員は原則として、単独室は1名、共同室は6名です。単独室には、原則1名で収容されます。網走刑務所の新しい単独室の広さは7.25㎡(約4畳半)です。現在日本の刑務所は、単独室の数を大幅に増し、被収容者の居住空間の向上に努めていますので、網走刑務所においても単独室は938部屋となり(平成22年1月現在)共同室に比べ格段に多くなっています。各室内には机・布団が置かれています。被収容者は身の回りの品の他、室内装飾品として写真や花瓶を置く事が許されています。』とある。

単独室[写真1]では、部屋の奥、右手に簡単な衝立で区切られた形で、洋式水洗便器が設置されている[写真2]便器に腰掛ければ、上半身は外から見える位の高さだ。一方、共同室[写真3]



写真1

は入り口右手の、個室の中に洋式水洗便器が設置されている。個室にはなっているものの、上部に窓があるので、腰掛けると上半身は外から見える構造だ。共同室のトイレには、被収容者の高齢化なのだろうか、手摺が付いている。

時間が無い。他の建物のトイレを探さなくては行けない。明治45年から昭和59年の現在の網走刑務所が新築されるまで、実際に使用されていた『五翼放射状平屋舎房』に向かった。この建物は、中央見張りを中心に、5本の指を放射状に広げたように、建物が配列されているため五翼放射状平屋舎房と呼ばれている。少人数でも監視しやすいという利点があり、ベルギーのルーヴァン監獄を模倣したものといわれている。5棟のうち



写真2



写真3

雑居房は、収容定員3～5人で126室あり、部屋の広さは6畳。独居房は収容定員1名で100室あり、部屋の広さは3畳。雑居房・独居房合わせて226室で構成されている。独居房のトイレ[写真4]は、部屋の奥に衝立で区切られた形で、そこには桶が置かれていたそう。雑居房のトイレは、ガラス張りの電話ボックスの様な個室[写真5]となっている。上部は透明ガラスだが、下部は磨ガラスだ。面白いことに、トイレの床は居室と同じ高さの平面では無く、掘り込まれた状態でコンクリートの土間になっている。やはり桶は無かった。どうやら、建設当初は、ガラスの電話ボックス状の仕切りは無く、中に入ると下半身が地下に潜るような状態で、目隠しとなった。つまり、上半身は外からでも確認できる構造であったようだ。興味深い事には、ベニヤを楕円形にくり貫いた板[写真6]が残されていた事である。これは、桶の上に置いて使う便座だ。少し痛



写真4



写真5



そうだが、桶に直接腰掛けるよりは、はるかにましだったことだろう。いけない、もう残り時間も少ない。休泊所に向かった。

休泊所は、明治24年に建設されたもので、昭和58年に再現された建物だ。休泊所とは、受刑者が塀の外に出て、日帰りできない作業を行う際に寝泊りした仮小屋の事だ。別名『動く監獄』と呼ばれ、作業の進行に伴い、次々と休泊所を建てては移動していった。部屋の中央は土間で、左右に寝台が設けられ、突き当たりがトイレ。トイレには、簡単な囲いがあ



写真6

るだけで、桶が置かれている[写真7]。網走刑務所の前方には、網走川が流れている。この川を利用して、刑務所では、生活物資を運び入れたり、農場へ肥料を運ぶなど、貴重な水路として利用していた。平成14年に再建された、『網走刑務所水門』では、筏に肥溜めを載せ農場に運ぶ様子がマネキン人形で再現[写真8]され



写真7

ている。様々な事に利用された水門であるにもかかわらず、再現にあたって、よりによって肥え桶搬出の場面を再現するとは・・・。何と素晴らしい博物館なんだ。時刻は6時になった。もう時間切れだ。閉門され、刑務所の高い塀の中に閉じ込められるのは、いかに、素晴らしい博物館でも勘弁願いたい。気がつけば全身汗びっしょりだ。他の見学者には、さぞや奇怪に見えたであろう。やはり、1時間では足りなかった。見落とした所もたくさんあるはずだ。無念でならない。到着までの時間を食われた、あのゲリラ豪雨とパトカーがうらめしい。しかし、待てよ、あのゲリラ豪雨とパトカーのおかげで、私は違反も事故も無く、当初予定外であったトイレ見学ができたのか。感謝。感謝。終わり良ければ、全て良し。充実したトイレの旅であった。



写真8

バングラデシュ便り15号 (January/2011)

たらいまわし

本会運営委員 高橋 邦夫

バングラデシュには多くの国立の研究機関、研修機関がある。特に目に付き耳にするのは、この国の主産業であり生業の基幹ともいえるべき農業開発に関する機関である。BARDもその一つであるが、BARDのあるコミラ市には、SRDI (Soil Research Development Institute) やBRRI (Bangladesh Rice Research Institute)、BARI (Bangladesh Agriculture Research Institute) などの農業振興、研究機関がある。しかし、その違いは何なのかはよく判らない。仮に、SRDIが農業土壌に関する専門的な知見を有する組織だとして、BARDにも農業土壌に関する専門部はあるのである。

この国では、緑の革命以降、長年にわたる化学肥料の過剰施肥による土壌の劣化が懸念されている。需要期における肥料価格の高騰と、供給不足から肥料の取り合いとなるファーターライザー・クライシスとして恒常化している矛盾した側面を持つが、それは兎も角、有機農業への転換は今後の農業振興にとって全国的な課題として認識されている。具体的には、土壌成分の有機物含有量の低下である。とすれば、当然のことながら、BARDにはそれらに関する有益な文献等の蓄積や問題解決のための処方箋はあっていいはずである。まずは、実態としてどのような経緯を辿ってきたのか、そのため、専門部に土壌の性状を地勢的、経年的に捕らえた資料の提出を求めた次第である。

しかしBARDには無かったのである。いかにも農業土壌の専門家を自称し、PhDを所持していることを誇りと

しているBARDのしかるべきディレクターは、図書館に電話をしたり、使用人に調べさせたりしながら、結局のところSRDIを紹介してくれた。そのディレクターに農業土壌の専門家であることを詰ると、彼は実用的な応用分野の専門家であり基礎的な分野の専門家ではないと余計な言い訳をしたものである。

仕方が無いからSRDIを訪れた。この機関の特徴は、土壌の物理化学特性を調べる分析施設を有していることであった。この国では、こうした分析機関をラボラトリー (Laboratory) と呼ぶ。所長は女性であり何の専門家であるかは知らないが、とにかくこれまた立派なPhDの保持者である。お茶とお菓子和果物の慰労もてなしを受けつつ、日本の田舎大学で取得したこと、日本での素晴らしい生活体験の賞賛、さらに近親がオーストラリアやニューヨークの大学に留学中であることなど、頼みもしない世間話を延々と誇らしげに自慢した。本題に入ると、その手の分析結果や研究論文は沢山あるという返事である。すぐに見せてくれという、今ここには無いという。BRRIに行けば手に入るだろうと澄ましている。こんな輩に多額の日本の教育予算を投入したかと思うと情けなくなるのは事実である。

そしてBRRIに行くことになる。そこにも無い。というよりは、多分知っているであろう？所長が留守とのことであった。あげくのはてに、“BARDはその道の専門研修機関であるから、BARDには必ず有るはずだ”と担当



者はのたまった。ちなみにこの機関は、名前は立派ではあるが、専門スタッフたる国家公務員は2名しかいないとのことである。結局堂々巡りは丸一日の時間の無駄を生んだ。

以上は文献探しの一齣であり、これに類した体験は数多い。活動当初、村の地図探しはまさにこの連続であった。BARDのスタッフは必ずあると言い張った。郡の役所へ行けばあると言い張った。結局、無かったから自ら地図作りをしたのである。また、この国の深刻な砒素汚染問題について、導入されている数々の処理プロセスに対する然るべき機能評価のことは聞いてはいた。しかしながら、それらの根拠となる有益な文献の提出を求めても、待てど暮らせど出てこないのである。

その後、農業技術機関の総元締めというべきBARC(Bangladesh Agriculture Research Committee)、研究機関であるBAU(Bangladesh Agriculture University)にも問い合わせた。そして現時点でも納得のできる資料は得られていない。つまり、人に十分に説明できる資料は未だ得られていないのである。

このような体験を6年間も続けている我々に、BARDのスタッフは言うのである。“これはわが国の問題である。専門分化しているわが国の問題である。日本のように、情報がいきなり容易に取

得できる環境にはないのである。”とあたかもよその国のことでもあるかのようにのたまうのである。その彼は、これまた日本の田舎大学でPhDを取得したことを唯一の自慢として生き延びているようだ。その彼も多くの場合、たらい回しの一環を担っているのである。知らなかったら知らないと言えいいものを。



SRDIのLaboratory（あまり使われていないという印象を持った）

バングラデシュ活動便り 尿添加コンポストに関するローカルNGOとの協働

バングラデシュでの活動の最近の動きとして、1ページのCIRDAPとの覚書調印があります。実施中の活動として、地元農家に有機肥料を提供（肥料代は収穫後に徴収）しているNGO、EFRDF（Environmental Friendly Rural Development Fund）と協働し、さまざまな有機材料をもとに作られていているコンポストに、リン濃度の高い尿を添加することで、肥料効果が高められないかというアイデアを実験を通じて確かめています。JADEが、近くの小学校に小使用トイレをつくり、EFRDFが尿の輸送、コンポスト作り、土地の提供を行い、現在トマトを使った施肥実験を行っています。効果が確かめられれば、有効な有機肥料として販売でき、開発パートナーとして収益の分配を受けられるほか、都市域で排泄された尿の資源活用方法としても位置付けられ、都市内水系への環境インパクトの軽減も期待されます。将来へのひとつの投資として自己資金で実施中です。結果にご期待ください。

運営委員会より

- 新しい年を迎えました。今年は研究発表会の年にあたり、6年ぶりで2回目の大阪開催です。タイムリーな企画を考えていきますので、東京開催では、発表、投稿がむづかしかった会員諸兄姉におかれましても積極的に参加いただきたく思います。
- 会費未納会員には昨年末督促させていただきましたが、至急の納入お願いいたします。（すでに納入された会員におかれましては、再度の督促ご容赦願います）
- 機関誌編集は鋭意進めておりますが、本年度も3月後半のお届けとなること、ご理解いただきたいと思います。
- 平成23年度の総会につきましては、例年通り6月に開催し、事業計画の審議をお願いするとともに、活動状況を報告します。

編集後記 先号では、執筆者に偏りが大きいというご指摘を受け、編集子もそれを感じておりました。今回は関西支部、そして大所帯になったバングラデシュ事務所にも執筆をお願いしました。藤田さんの原稿を読み、一度始めた事業を継続するためには絶えず工夫・改善しようという気持ちを持ち続けなければいけないことを改めて思いました。今回、バングラデシュからは、メンバー紹介だけですが、これからは、彼らの経験を通じた本音なども書いてもらいたいと考えています。（酒井）

ふくりゅう 通巻67号 目次

アジア太平洋総合農村開発センターと覚書調印	1
第51回定例研究会のお知らせ	1
バングラデシュ現地スタッフの紹介	2
関西支部活動紹介	3
第62回 尿尿・下水研究会例会報告 清水治氏「世界の列車トイレの現状」	4
平成22年度小平市ふれあい下水道館・特別講話会 第2～3回の報告	4
第63回尿尿・下水研究会例会ご案内	6
旧事九官録 巻16「網走監獄の事」	5
バングラデシュ便り15号「たらいまわし」	7

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>